

自己欺瞞におけるセルフトークの機能に関する検討

田澤 安弘

目次

- I. はじめに
- II. 自己欺瞞とは何か
- III. セルフトークとは何か
- IV. 自己欺瞞におけるセルフトーク
- V. エポケーの視点から見たセルフトークの2型
- VI. 自己欺瞞の不透明性
- VII. おわりに

I. はじめに

私はこれまで、クライアントの「二重性(duplicity)」(Kaiser, H., 1965), すなわち「自己欺瞞(self-deception)」(Shapiro, D., 1989)に焦点を合わせたアプローチに注目し、臨床場面で実践してきた。あいまいであったクライアントの主観的体験が分節化し、情動体験が促進されるという点で、効果的な心理療法であることを実感している。

ところが、精神病理に対して自己欺瞞の視点からアプローチする研究は、臨床心理学の領域においてほとんど存在していないようである。その理由として説得力があるのは、ロイ・シェーファー(Schafer, R., 1992)のものである。彼は、「むかしから分析家は、こうした自己欺瞞に特有の言い回しとして姿を現わす現象については、防衛を説明する中で取り上げてきた」と述べている。

これまでそうせざるを得なかったのは、従来のフロイト派が、全体としての人間(person)を扱うモデルではなく、人間を自我、超

自我、エスといった心的装置に分解して理解する、機械論的なメタサイコロジーのモデルに依拠していたからではあるまいか。無意識のモデルではなく、現代的な意識のモデルによって精神病理を理解しようとするれば、われわれはクライアントの振る舞いを、つまり全体としての人間が営む行為としての自己欺瞞を理解する必要がある。

また、自己欺瞞においては、セルフトークが重要な役割を演じている。通常であれば、セルフトークはさまざまな良性の機能を担っているのだが、精神病理においては悪性の機能が優位になるようである。こうした悪性のセルフトークと自己欺瞞を有意味に結合して、自己欺瞞においてセルフトークが積極的に担っている機能について解明することが、本論の目指すところである。

II. 自己欺瞞とは何か

自己欺瞞のモデルは多様である。私の考えは、デイヴィッド・シャピロ(Shapiro, D., 1965, 1989, 1996)やケント・バック(Bach, K., 1981, 1994)の考え方を基本としており、たとえば、ドナルド・デイヴィッドソン(Davidson, D., 2007)のような「二重の信念」であるとか、「パラドックス」や「無意識的意図」を想定する考え方とは対立するものである。

自己欺瞞の研究者のなかには、フロイト的な意味での無意識を排除するのではなく、むしろそれを視野に入れた自己欺瞞論を展開す

キーワード：自己欺瞞，私的発話，セルフトーク，内言，メタ自己覚知

べきであると主張するものもいる(Lockie, R., 2003)。確かに、現代の認知科学は、われわれの心のプロセスが、意識の外で自動的に展開することを当然のこととみなしているようである(Kihlstrom, J.F., 1987; Smith, D.L., 2004)。しかしながら、やはり私は、自己欺瞞について無意識を想定しないで論じるつもりである。というのは、「意識下のものは、意識上のものと同様、なおひとつの意識である」(Scheler, M., 1915)から、加えて、無意識を想定すると防衛機制としての(強い)抑圧や解離が問題になるのであって、もはや自己欺瞞と呼べるのか疑問が残るから、である(注1)。

では、自己欺瞞の具体例を提示する。これは、ジャン＝ポール・サルトル(Sartre, J.P., 1943)が『存在と無』のなかで引用している、精神分析学者ヴィルヘルム・シュテーケル(Stekel, W., 1955, 1956)のものである。事例は「オルガスムスを自制する女性」で、「彼女らは夫に文句を言って責め立て、その文句を医者のところまで持ち込んで、自分是不感症だと盛んに力説、誇張するため、老練な心理学者にはそのわざとらしさがかえって目につく」と描写されている。

「E・K嬢は性交ではオルガスムスに達したことがなかったが、オナニーでは常に最高の快感を感じていた。……恋人との性交では、非常に愛しているにもかかわらず、ぜんぜん感じない。いつも、何か他のことを考えているうちに、たちまち一種の観念奔逸の状態になる。『誰かが見ていたらどうしよう!』とか、『もしこのことがお母さんに知られたら!』とか、『今晚することは何だったかしら!』等々。要するに、他の方面に考えを向けて、感覚に考えがおもむくのを牽制するのであった。しかし、恋人の言うところによれば、ときどき彼女も強烈なオルガスムスを感じる。身体の動きから見ても確かだという」

シュテーケルによると、愛しているはずの男性との性交中に、疼痛や不愉快しか感じないと訴えたり、一切の快感を否定したりする場合には、その女性は自分自身を欺いているのだという。つまり、本当は相手を拒んでいて身体が執拗に「NO」と言い続けているにもかかわらず、日常的に「愛している」とか「最良の夫」などと口にするのは、「魂がだまされている」というわけである。

シュテーケルは「不快への意志」と「快楽への意志」とのあいだの戦いと呼んでいるが、彼が「一種の観念奔逸」と描写するこの性交中の内言は、この文脈では快楽を回避しようとする努力のうちに遂行されているようである。このときの彼女の意識は、『誰かが見ていたらどうしよう!』などの内言として構成されているので、性交中にもかかわらず、その性行為自体は主観的体験としては拡散したままであるように思われる。

また、彼女本人は、どうして自分が性交中に内言に没入しているのか、その理由を理解していないはずである。自分の内言もただ生きられている意識のレベルにあるだけで、自分がそうしているという覚知さえないのかもしれない。彼女の一人称のパースペクティブにしてみれば、内言は自動的に反復されるだけであって、みずから問題として提示するのはあくまでオルガスムスを感じないということなのである。

では、私が考える自己欺瞞の定義である。自己欺瞞とは、人と人とのあいだでアクチュアルなフィーリングの体験を回避するために遂行されるプロセス(真実に触れることからくるおのれの痛み[不安]をかばう振る舞い)のことで、「信じること(believing)」(何かをアクチュアルに感じたり信じたりしていること)と、「考えること(thinking)」(自分は何かを感じたり信じたりしているのだと考えること)とのあいだが、「癒合(syncrétisme)」

(Wallon, H., 1949)していることである。言い換えると、「現に体験されているものと、ただ想像されているにすぎないものとの区別がなく、私と他者との区別がない」(Merleau-Ponty, M., 1988)状態のことである(注2)。

さらにいえば、自己欺瞞は「信念(belief)」の問題として論じられることがあるが、私の考える自己欺瞞は信念の問題ではまったくない。というのは、バック(Bach, 1981)が言うように「pであると(あるいは証拠がpを強く裏づけると)信じている人は、pでない(not-p)と信じるに至ることなく、pでないと自分自身を欺くことができる」からである。むしろ、自己欺瞞において問題なのは、「pであるという信念それ自体ではなく、pであるという考えが、とりわけ持続的か繰り返して生起する」(Bach, 1981)ということであるように思われる。つまり、自己欺瞞の顕著な特徴は、「厄介なこと(touchy subject)」が繰り返し思い浮かぶということ、あるいは「うるさくつきまとう懐疑(nagging suspicions)」(Bach, 1997)があるということである。このことに関しては、後に具体的に例証するつもりである。

Ⅲ. セルフトークとは何か

まず、アライン・モリン(Morin, A., 2009)を参照して、用語の整理を行う。「セルフトーク(self-talk)」は、「内言(inner speech)」と「私的発話(private speech)」からなっているのだが、前者の内言は「前音声的発話(subvocal speech)」、内潜的発話(covert speech)、「内的ダイアログ(internal dialogue)」、「聴覚的イメージ(auditory imagery)」などと、後者の私的発話は「自己指向的外言(outer self-directed speech)」などと表現されることもある。また、私的発話つまり“private speech”は、「外言」、「独語」、「自発的発話」などの訳語があてられる

こともある。

内言とは、ダイアログ的な「社会的発話(social speech)」特有の性質が残存した、「沈黙のうちに自分自身に話しかける活動」のことで、思考過程や自己覚知と密接不可分であると同時に、「心的イメージをも含んだ、イントラパーソナル・コミュニケーションというより広いプロセスの一部」をなしている。私的発話とは、重要な「自己調整機能(self-regulatory function)」を担うもので、「自己に向けた発話(speech-for-self)」を声として発するものである。また、セルフトークは成人になったからといって消失するわけではなく、96%の人たちは、一人でいるときに声に出して自分自身に話しかけることがあるのだという。以下は、モリンが要約している、セルフトークのさまざまな機能である(Morin, A., 2009)。

- ①問題解決、プランニング、意思決定などに関わる「自己調整」機能。
- ②読む、書く、話す、計算する、といったことに関わる「言語」機能。
- ③問題解決や意思決定や言語理解といった、高次の認知プロセスに不可欠な「記憶」機能。
- ④リハーサルによる社会行為の準備、情動の表現や表出の媒介、想像上の人物との内的ダイアログによる空想などに関わる「その他」の機能。

このように、セルフトークにはさまざまな機能があるのだが、本論では特にその自己調整機能に着目したい。セルフトークの自己調整機能について論じている研究者は少なくないが(Malt, B., 2007; Diaz, R.M. and Berk, L.E., 1991; Luria, A.R., 1961), 以下に、セルフトークの自己調整機能が発生するプロセスを要約する。

アレクサンドル・ルリヤ(Luria, A.R.,

1979)は、人間の、意識的な、言語に媒介された随意的行為の発生について、精神間の活動から精神内の機能に移行するプロセスとして、内言と絡めながら説明している。それによると、われわれの随意的行為の起源は社会的な形式の行動にあり、それはもともと二人の人間のあいだで分かちもたれていたものである。最初は、子どもの運動行為は母親の言語行為(指示)で始まり、子どもの運動(实际的行為)で終わる。次の段階では、子どもは自分で言葉話すようになり、その私的発話を利用して自分自身に言語命令を出し始める。その後、子どもの私的発話は内面化されて内言となり、この内言が行動の調整機能を担うようになるのである。

では、自己調整的なセルフトークの実例である(Morin, 2009)。何らかの問題解決場面におかれている人は、実際に行為しながら次のようなセルフトークを発するかもしれない。

- ①問題を正確に規定すること。「さて、一体どうなってるんだ? どうすればいいのかな?」
- ②問題に対する効果的な接近。「この問題をうまく解決する方法を考えなくちゃ」
- ③問題に集中し続けること。「違う、これは重要なことじゃない。こうしちゃ駄目なんだ。じゃあ、これはどうだ」
- ④自己賞賛や方法の再調節を絡めて漸進的に評価すること。「よし! やったぞ! / 違う、こうじゃない。いいさ、時間をかけてやり直そう」

そのほか、たとえば強迫的な賭博者であれば、スロット・マシンやルーレットで負けが続いていても、「ここにもう一度賭けてみるか。こりゃあ、いいゲームだ」のような、不合理な考えや誤った信念を自分自身に言い聞かせるかもしれない(Morin, A., 2009)。アルコール依存症者であれば、「女房のこと

も、子どものことも、仕事も、みんな大事さ。俺はちゃんとした生活がしたいのさ。でも、自分以外の力に振り回されてしまうんだ」(Fingarette, H., 1985)とつぶやくかもしれない。また、不安/恐怖症の場合には「エレベーターがとまったらどうしよう」と、強迫症の場合には「～すべきかな、それともすべきじゃないかな」と、反復する内言にみづから苦しむのかもしれない(Martorano, J. T., and Kildahl, J. P., 1989)。

IV. 自己欺瞞におけるセルフトーク

「セルフトーク」のうち「内言」は、論理情動療法のアルバート・エリス(Ellis, A., 1962)が「内面化された陳述(internalized statements)」や「自己陳述(self-statements)」として論じているものや、認知療法のアーロン・ベック(Beck, A. T., 1976)が「自動思考(automatic thought)」と呼ぶものに近いのかもしれない。エリスやベックが取り上げるクライアントの内言は、主として日常場面で展開されたものである。つまり、クライアントが心理療法の場面で事後的に想起して、それを治療者に対して語ることである。内言であるかぎり、その場で口にされることはない。口にされたとすれば、それは私的発話への移行を意味している。必然として心理療法場面における内言は、沈黙というかたちをとるはずである。

それに対してシャピロ(Shapiro, 1989)は、治療者の目の前で、つまりその場で具体的に展開する私的発話に注目している。それは、一次的に治療者とのコミュニケーションを指向するダイアログというよりも、むしろモノログのような言語行為である(注3)。彼は、神経症者一般の特徴を自己欺瞞であるとして、彼らの自己指向的外言を「自己を欺く言語行為(self-deceptive speech act)」と名づけている。そこではヴィゴツキー派の用語

が一切使われていないが、明らかに自己欺瞞の私的発話について論じられているのである。では、シャピロの具体例をいくつか掲載する。

彼女は動揺した様子で口火を切る。すなわち「私ったら、何やってるんだろう？こんなのもう終わりにしなくちゃ！何にもならないわ！いいことなんて何もない！口をきくこともできない！彼ったら、何も言わないの！つまらない人！いいことなんて何もないけど、やめられそうにないわ！どうして一緒に住んでいいのかしら？まるで悪い癖みたいだわ！……」と。

ここでは、不自然な誇張された話し方が注目されている。腹立たしげに、自分を非難するように話しているのである。治療者に向けて話しているというよりも、むしろ自分自身に苦言を呈しているわけである。

次の例では、ある若者が、職に就くべきか決心がつかないことを話している。彼は、誇張された、不自然な感じのする確証的な断言でもって結論を下す。

患者：こうするのが正しいはずですよ！……おそらく。

治療者：おそらく。

この男性は、自分には自信があるのだと考え、そうなのだと言主張し、自信たっぷりに振舞おうとしていた。けれども、自分は自信をもって決断しているのだと、自分自身と治療者に向けて納得させようと誇張して努力するものの、本当は自分に自信がないのだというフィーリングが、あるいは自分に対する懷疑の念が、「おそらく」という言葉に顔を出している。

次の例では、自分が気にかけていることについて話す患者の癖のある話し方が注目されている。ある若い女性が、自分の恋人と仲た

がいたことについて話している。彼女は口論の最初から語り始め、その仔細をくまなく、彼はこう言った、私はこう言ったなど、説明していく。そして、治療者は、この話がうんざりするほど長ったらしいと感じ始める。

治療者（介入する）：ちょっとすみません。

それにしても、そんなに注意深く微に入り細にわたってお話されるのは、どういうことなのでしょうね。

患者：うーん、……わからないわ。……何が起こったのか正確に知っていてほしいのです。

治療者：私が思い違いをするかもしれない？

患者（混乱して笑う）：うーん……うーん……私が八つ当たりするって、彼が言うんです！

治療者：彼の方が間違っていたのかどうか、ちょっと確信がもてないのかもしれませんがね。

患者（また混乱して笑い出し、彼女の声は小さくなっていく）：うーん……私……私が間違っていた、たぶん、……いいえ、そうじゃない！……分かりません……たぶん、私が……いまはどうすればいいのか分からないわ。

この女性は、自分では恋人の侮辱的な行動について語っているつもりなのだが、実際には、自分自身の行動や自分に対する彼の非難について抱いている疑念を追い払おうとしている。もちろん、話している最中には、自分自身にそうした疑念があることすらはっきりと気がついていない。

このように、シャピロのいう自己を欺く言語行為は、流暢に語られる作話のようなものではなく、断片的なものである。そこで一次的に指向されているのは、相手とのコミュニケーションではなくて、話し手自身に影響を及ぼすことなのである。ここでシャピロは、

発話自体が意識や自己覚知を歪曲するように機能していると述べているのだが、これはアクチュアルなフィーリングとしての疑念を回避するための、セルフトークによる悪性の自己調整として理解されるであろう。自己を欺く言語行為に認められるこのような特徴は、やはりセルフトークの特徴でもある。というのは、ルリヤ(Luria, A. R., 1979)が述べているように、セルフトークには形態が崩れているという特徴、つまり主語のない述語的な言語行為であったり、圧縮されて断片的な言語行為であったりすることに加えて、コミュニケーションな目的を一次的に指向しているわけではないという特徴があるのである。

自己欺瞞のセルフトークを記号で理解すると、以下のようになる。

クライアントは

1. p であると信じていると同時に、p であってほしくないと思っている。
2. p が思い浮かぶ。
3. p でない(not-p である)と自分に言い聞かせる(内言か私的発話による)。
4. p でない(not-p である)と考えてもやはり p が繰り返し思い浮かび、3 と 4 を反復する。

このように、セルフトークには二種類あることが理解される。ひとつが、「3. p でない(not-p である)と自分に言い聞かせる」タイプのセルフトークである。もうひとつは「2. p が思い浮かぶ」で、これは、not-p と自分自身に言い聞かせるものの不随意的に p が思い浮かび、それが口にされるということである。もちろん、他性を帯びた「インナーボイス(inner voice)」や内言のレベルにとどまって、私的発話とはならない場合もあるであろう。これをシュテーケル(Stekel, 1953)の思考のポリフォニー(polyphony of thought)論で理解すると、「主旋律(melody)」

ないし「上声(upper voice)」として響くインナーボイスすなわち not-p にもかかわらず、調子はずれの「内声(middle voice)」あるいは「対位的に配置された声(counterpoint)」としての p が耳についてしまい、ポリフォニー全体が「脱ハーモニー(disharmony)」の状態に陥るということになる。

2 のタイプのセルフトークは、自分に対する懐疑であるから、これを「自己懐疑(self-doubt)」のセルフトークと命名する。そして、3 のタイプのセルフトークを、「自己幻想(self-delusion)」のセルフトークと命名する。自己欺瞞では、この二種類のセルフトークが重要になってくるのである。

V. エポケーの視点から見たセルフトークの 2 型

自己欺瞞の重要な特徴として、「緊張感(tension)」をあげる研究者は少なくない(Audi, R., 1997; Back, K., 1997; Shapiro, D., 2000; Funkhouser, E., 2005)。シャピロ(Shapiro, 1996)も、自己欺瞞は「意識的に、周到に準備した上で企図されるものでないことは明白だが、意識の活動や意識的な努力もある程度絡んでいることは疑いのないことである」と述べている。このように、自己欺瞞のプロセスは無意識的に展開するのではなく、そのためには何らかの努力やそこからくる緊張感がともなわれるようである。

ここで、セルフトークの 2 型すなわち「自己懐疑」および「自己幻想」のセルフトークと、自己欺瞞の努力あるいは緊張感を絡めて、概念的な整理を行うつもりである。まず、ロバート・アウディ(Audi, R., 1988)の記述に注目する。

「自分には勇気がある(p)と自認する自己欺瞞について考えてみよう。ここには自己欺瞞の特徴である一定の緊張感があり、それに

よって、自己欺瞞が通常は不安定であることの説明がある程度つく。pが反証される感覚は、その人を欺瞞から呼び戻して、自分には勇気がないと知っていることを意識に対して秘匿するヴェールを取り除くように脅かす。けれども、自己欺瞞が足場になっている欲望や欲求は、その人が把握している根拠に抗う方向に引き寄せ、真実を見て取ることを阻止するように脅かす。第一の力が優勢であれば、その人には真実がはっきりと見えて、それ以上欺かれぬ。第二の力が優勢であれば、その人は自己欺瞞から一本槍の幻想(single-minded delusion)へと移行して、真実がまったく見えない。思うのだが、自己欺瞞というのは、こうした二つの力が均衡を保っているところにのみ存在するのである」

ここでいう第一の力が向かう方向は、自己懐疑である。それに対して、第二の力が向かう方向は自己幻想である。自己を欺くものは、絶え間なく自己懐疑の方向にひきつけられるので、それと反対の自己幻想の方向を指向するように努力しなければならない。このようにして動的な均衡を保っていることが、すなわち緊張ということなのであろう。このような努力によって緊張感が持続すると、その主体は疲弊することが自明である。この疲れのせいで、自己欺瞞は不安定なものになるのかもしれない。神経症者が疲れを訴えるのは珍しいことではないが、それはこのようなかたちで常に緊張を強いられていることも影響しているはずである。自己懐疑と自己幻想のセルフトークがこのようなかたちで動的均衡を保っているのが自己欺瞞であるとして、この動的均衡について、もう少し詳しく考えてみることにする。

ウルフガング・ブランケンブルグ(Blankenburg, W., 1979)は、世界の实在性に対する「確信」を排除するエドムンド・フッサール(Edmund Husserl)の現象学的エ

ポケーを「エポケー I」、それに対する「懐疑」を排除するアルフレッド・シュッツ(Alfred Schutz)の自然な態度のエポケーを「エポケー II」と命名して、それぞれ区別している。ブランケンブルグが統合失調症性の疎外感との類似性を見て取ったエポケー IIは、エポケー Iと同様に、自明性に埋没している自然な態度から離脱することを意味している。けれども、両者はあくまで自然な自明性に対する逆方向の営みである。つまり、エポケー Iは能動的に営まれる態度変更(自然な態度をエポケーすること)のことであり、エポケー IIは受動的に被る態度変更(自然な態度が営むエポケー [懐疑の排除] の機能不全)のことなのである。

このようなエポケー IIと自明性の喪失を、統合失調症を超えて自己欺瞞の精神病理にまで拡大して理解すると、次のようになるであろう。まず、自然な自明性が崩壊すると(エポケー II)それまでの自然な態度がままたなくなり、いろいろなことに無頓着ではいられなくなる。ここで生起するのが、自己懐疑のセルフトークである。そして、そこから努力や緊張感とともに幻想の方向に向かうのが、自己幻想のセルフトークである。したがって、自己欺瞞の本態はまずもって自己懐疑を排除することができないところにあると言え、自己幻想のセルフトークは、アクチュアルなフィーリングに触れることを回避するための自己調整機能を担っているのである(したがって、希望的観測や願望的思考やポジティブ・イリュージョンが自己欺瞞の一次的問題であるとは言えない)。

シャピロ(Shapiro, 1989)は、ここでいう自己幻想のセルフトークを「自己を欺く言語行為」と命名しているようだが、私は自己懐疑のセルフトークも含めてそう呼ぶことを提案したい。というのは、先に引用したアウディ(Audi, 1988)が言うには、自己欺瞞から呼び戻す力が優勢であればその人には真実が見

えてそれ以上欺かれることはないということであるが、実際には自己懷疑のセルフトークそのものが自己を欺く言語行為として発現することがよくあるからである。これが、自己欺瞞の自己欺瞞たる所以なのであろう。

たとえば、自己懷疑が極度になると、抑うつ症状の強いクライアントによく認められるような仮借ない自己批判(self-reproach)、つまり強迫的自己批判としての懷疑が現われる場合がある。このような自己批判の目的は自分の振る舞いを改めることではなく、自分を罰することであり、その声のトーンは非常に攻撃的なものである。けれども、シャピロ(Shapiro, 2006)が言うように、「自分は意気地なし」や「～すべきじゃなかった(～すべきだった)」といった非難、つまりセルフトークのすべてを本人が信じているわけではないし、そこでは自己批判ないし自己懷疑のセルフトークそのものが自己欺瞞の振る舞いになっているわけである。

また、エリック・ファンクハウザー(Funkhouser, E., 2005)は、本当に p であると信じている人のように肯定するものの、それが not-p であると信じていたい願望と齟齬をきたすことのない場合があると述べている。具体例はあげられていないが、臨床的には次のように理解されるであろう。つまり、クライアントの発言自体が、全身全霊の込められた心からのものではないということである。たとえば、p について自己を欺いているクライアントに対して治療者が p であると解釈した場合に、その人がすんなりとそれを認めることがあるのだが、その是認自体も自己欺瞞の態度から発しているということである。

VI. 自己欺瞞の不透明性

相手に嘘をつく他者欺瞞と、自分に嘘をつく自己欺瞞は、一体どこが違うのであろうか。

シャピロ(Shapiro, 2000)は以下のように述べている。

「神経症者本人は、一般的に言って、自分が相手に提示していることと自分自身に提示していることが分裂していたり、自分がアクチュアルに感じていることと考えていることが分裂していることに気がついていないであろうし、自分が考えたり感じたりしていることと、自分はこう考えているのだ、こう感じているのだと思っていることが分裂していることに、気がついていないであろう。その意味で、われわれが検討しているこのプロセスというのは、本当の二重帳簿(double book-keeping)ではない。つまり、それは相手をだます欺瞞のプロセスではなくて、自己欺瞞のプロセスなのである」

シャピロがここで述べている二重帳簿とは、非合理的な思考と合理的な思考が両立している事態を指している。つまり、「事象(occurrences)」(Ryle, G., 1949)としての(したがって傾向性[dispositions]ではない)、p と not-p が両立している事態である。もしも相手に嘘をつこうとすれば、欺く側が本当は p であることが分かっている、その上で相手に not-p であると提示する必要がある。これが他者欺瞞である。ところが、自己欺瞞というのは、本人が両者の分裂そのものにはっきりと気がついていないのである。

どうして自己を欺く者は、自分が欺かれている状態にあることに気がつかないのであろうか。このような事態は「自己欺瞞の不透明性(opacity of self-deception)」(Funkhouser, 2005)と呼ばれている。自己欺瞞について説明するために、無意識やパラドックスを想定するものがあるのは、このためである。このような不透明性について理解するためには、モリン(Morin, 2004)の意識水準のモデルが役に立つであろう。以下に要約する。

まず「無意識(unconsciousness)」である。これは、環境に対しても自分に対しても、何ら情報処理が行われない状態のことで、たとえば、眠っていたり、脳が損傷して昏睡状態に陥っていたりする場合のことである。

次に「非意識的な心(non-conscious mind)」である。これは、いま現在意識されていない心のプロセスからなっている。たとえば、自動車を運転中に、意識的に注意を向けることなくさまざまな標識を知覚することである。それから、非意識的な動機づけの場合には、次のようになる。ある女性に恋心を抱いたとして、もし自分にはすでに交際している人がいたとすれば、この考えを受け入れることはできないであろう。そのことについて考えないようにするわけである。動機づけはあるが、本人はそのことを覚知しない。意識は覚醒しているわけであるから、この非意識的な心は無意識であるとは言えない。けれども、精神的な出来事を直接的に体験することはできない。つまり、心の中に何かが生じたとしても、それは拡散していて焦点が外れているのであり、気がつかれないのである。

次に「意識(consciousness)」である。これは人間だけでなく動物にも認められるもので、注意の焦点を環境に向けていて、周囲と関わっている場合である。非内省的な意識であるので、主体は、身体の漠然とした感覚が感じ取られるだけの「一人称のパースペクティブ(first-person perspective)」に置かれている。

注意の焦点が環境ではなく、自己に向けられると、それは「自己覚知(self-awareness)」になる。自己に関わる情報処理を見つめる内省的な観察者であり、自分が目覚めていること、精神活動を体験していること、行動していること、自分には独自の特徴があることなどに気がつくことが可能である。自己覚知の状態にあると、「楽しいな」、「自分は好感の持てる人柄かな」などと口にすることもでき

る。また、感覚、知覚、情動、思考などを体験しているだけであれば、それは意識のレベルであるが、そうした自分自身の意識体験を再現前化して覚知するとそれは自己覚知である。この場合の自己覚知は「メタ意識(meta-consciousness)」ないし「内省意識(reflective-consciousness)」と呼ばれることもある。

最後に「メタ自己覚知(meta-self-awareness)」である。これは、自分が自己覚知的であることに気がついている状態で、自己覚知のレベルであれば「楽しいな」と口にするだけであったが、ここでは「自分が楽しいってことは分かっている」と口にすることができる。この意識水準に到達すると、時間を越えて自分が同一の人間であること(自己の歴史性[self-history])、自分の考えや行為の主体であること(作用主体[self-agency])、自分が環境から独立した存在であること(自己凝集性[self-coherence])が理解される。つまり、メタ自己覚知とは、「自己を覚知すること(awareness of self)」なのである。

以上、モリンの意識水準のモデルを提示した。自己欺瞞の不透明性を説明するには、ここで言う「メタ自己覚知」と「非意識的な心」の概念が特に有用であるように思われる。

まず、「非意識的な心」に関わる部分である。一人称のパースペクティブにある主観的体験は、そのままではただ生きられるだけの前言語的な意識のレベルにあるのだが、それは通常であれば言語によってメタ意識ないし自己覚知へと変貌を遂げる。反対に言えば、「内言なくしては、自己覚知は比較的原始的で、あいまいで、未構成なものにとどまる」(Morin, A., 2009)。ジョセフ・ラウン(Rhawn, J., 1980)の「意識的自己欺瞞(conscious self-deception)」も、ドネル・スターン(Stern, D. B., 1997)の「未構成の経験(unformulated experience)」という自己欺瞞も、このようなことを言っているわけである。

しかしながら、自己欺瞞に関してこのような消極的かつ受動的な視点(思い浮かべないこと、言語表象を作り出さないこと)からの理解にとどまるのであれば、自己欺瞞の努力、つまり積極的かつ能動的な側面が無視されてしまうことになる。どうして p という信念が明確にメタ意識化されないのかといえば、それは不安や不快感を触発するような考えがクリアではない萌芽的な状態でモニターされたとたん自己欺瞞の能動的なプロセスが発動するから(Shapiro, 1996)、つまり、p という信念や内的動機が言語によってメタ意識化されずに拡散した状態にとどまると同時に、自己幻想を指向して not-p がメタ意識化されるからなのである。本論独自の主張でもあるのだが、ここで重要になるのは、自己欺瞞における「メタ自己覚知」とセルフトークの絡みである。

ファンクハウザー(Funkhouser, 2005)は、「一次的信念(first-order belief)」と、「二次的信念(second-order belief)」ないし「より高次の信念(higher-order belief)」を区別している(注4)。一次的信念とは、p という信念のことである。それに対して二次的信念とは、自分は p でないと(not-p であると)信じているのだという信念のことである。彼が言うように、高次の信念は一次的信念よりも意識的な覚知と結びついており、二次的信念は覚知される自己意識や精神状態と関連している。

発生的に言えば、一次的信念が二次的信念へと転換されると、そこにはもはや一次的信念がそのまま組み込まれているわけではない。つまり、p であると信じていること(一次的信念)から、自分は not-p であると信じているのだと考えること(二次的信念)へと移行するからである。これは、たんに生きられている意識から、自己覚知というメタ意識へと、さらには自己覚知のメタ意識である「メタ自己覚知」へと移行することでもある。ファン

クハウザーは触れていないが、この移行には言語つまりセルフトークが重要な役割を演じているはずである。

モリン(Morin, 2005)は、自分自身に話しかけるセルフトークによって自己内省のプロセスが明確になり、私的発話が自己覚知を高めることを論じている。言語は、自己覚知において重要な機能を担っているのである。たとえば、たんに生きられている怒りが「もー、腹が立つ!」と言語化されたとすれば、その人は、意識から自己覚知というメタ意識へと移行することになる。さらに、それがメタ自己覚知のレベルで言語化されたとすれば、「自分が腹を立てていることは分かっています」という間接話法化されたセルフトークになるかもしれない。

自己欺瞞の場合であれば、一次的な信念としてはたとえば誰かに対して立腹している(p)ののだが、より高次の意識レベル、つまり自己覚知やメタ自己覚知のレベルでは、繰り返し not-p であると自分自身に言い聞かせることによって、二次的信念として「あの人はよい人です。立腹などしていません」(not-p)と認識していることになるのかもしれない。もちろん、そのようにして形成された自己認識(self-knowledge)は不安定なものであることに疑いないのだが、本人にとって自己欺瞞が不透明であることの核心はここにある、というのが私の結論である。一人称のパースペクティヴからみた主観的意識体験としては、自己欺瞞のセルフトークによって明確に覚知される自己認識となるのは not-p なのであって、p という一次的信念は未構成にとどまってしまうのである。

自己欺瞞が解消されて真実が見えるとき、つまり覚知されていた二次的信念ではなく、何となく分かっていた一次的信念が分節化して主観的体験として覚知されるときには、やはり(自己欺瞞がそうであるように)セルフトークによってメタ意識化される必要があるのだ

あろうか。答えは「NO」である。特定領域の自己欺瞞が解消される時、クライアントの発話は言葉に魂のこもっていないモノローグではなく、全身全霊のこもった、身体性に根ざすダイアローグになっているはずである（それ以前に自己欺瞞の解消には他者の介入が不可欠であるが）。反対に、一次的信念から二次的的信念への移行（意識から自己覚知やメタ自己覚知への移行）は、声に出して言わないセルフトーク、つまり内言によっても可能なはずである。自己欺瞞者の場合には、この内言自体が、すでに自己を欺く方向に利用されているのである。

VII. おわりに

自己欺瞞における p と not-p は、何らかの矛盾や、不自然さや、緊張のなかで、一人の人間の態度に同時的ないし継時的に姿を現わす。しかしながら、説明したような不透明性のために、このような姿を本人は自覚することができない。本人の一人称のパースペクティブからは、その全体が見えないものになっているのである。したがって、自己欺瞞を解消しようとするれば、別のパースペクティブを持つ他者の介入が必要となる。自己欺瞞の心理療法については、機会を改めて論じるつもりである。その際には、自己欺瞞を「分裂したひとつの意識の枠内における声たちの絡み合い（つまりミクロの対話）」(Bakhtin, M. M., 1995)、あるいは多声性の視点から理解し、「声」の心理療法論が構築されることになろう。

[注]

- (1) 自己欺瞞は, Stiles, Leiman, Shapiro, Hardy, Barkham, Detert, and Llewelyn (2006) の「問題のある体験の同化スケール (Assimilation of Problematic Experiences

Scale)」に含まれるレベル 0 ではなく、レベル 1 からレベル 2 に相当するものと考えられる。以下はそのスケールの概要である。

- 0 追い払われた状態 (Warded off)/ 解離された状態 (dissociated)

クライアントは問題を自覚していない。問題のある声は沈黙を守っているか、解離されている。感情はごくわずかであろうが、その場合には回避が成功していることを示している。あるいは、問題が、身体症状や行動化や意識状態の豹変 (state switches) として姿を現わすであろう。

- 1 厄介な考え (Unwanted thoughts)/ 積極的な回避 (active avoidance)

クライアントは、体験について考えたがらない。問題のある声たちは、臨床家の介入か外的状況に反応することによって姿を現わし、押さえ込まれているか回避されている。感情は極めてネガティブなものであるが、突発的で焦点が定まっていない。感情と話の内容の結びつきは、はっきりとしたものではないであろう。

- 2 漠然とした気づき (Vague awareness)/ 到来 (emergence)

クライアントは問題のある体験に気がついているが、それを明確なかたちにして説明することができない。問題のある声は、維持されている覚知のなかへ姿を現わす。感情には、強い心的な痛みかパニックが含まれているが、それらは問題のあるマテリアルと関連している。

- 3 問題の陳述 (Problem statement)/ 明確化 (clarification)

話の内容に、問題に関わる明確な陳述 (取り組むことのできる何か) が含まれている。対立する声たちが分化して、互いに話し合うことができる。感情はネガティブなものだが、対処できる範囲にあり、パニック様のものではない。

- 4 理解 (Understanding)/ 洞察 (insight)

問題のある体験がどうにかして明確に話され、理解される。声たちは、相互的な理解に到達する (意味の架け橋 [a meaning bridge])。感情は、不快な認知だけでなく心地よい驚きも、混合されているであろう。

- 5 応用 (Application) / 徹底操作 (working through)

なるほどと理解されたことが、問題に取り組むために利用される。声たちは、生活上の諸問題を解決するために一丸となる。感情の基調は、ポジティブで楽観的なものである。

6 処理能力の高さ(Resourcefulness)/問題解決(problem solution)

かつては問題であった体験が資源となつて、問題解決のために利用される。声たちを、柔軟に利用することができる。感情はポジティブで、満ち足りたものである。

7 統合(Integration)/克服(mastery)

クライアントには、解決策が自然にわきあがってくる。声たちが最大限に統合され、新たな状況に直面した際の資源として役目を果たす。感情はポジティブであるか、当たり障りのないもの(neutral)である(言い換えれば、もはや過度に感情が高ぶらないということ)。

- (2) 広瀬と加賀(1997)によれば、日本語は「本来的に非伝達的な性格を持つ言語」である上に、同じ表現が聞き手の存在を考慮に入れる「公的表現」として用いられることもあれば、考慮に入れない「私的表現」として用いられることもあるのだという。日本語の場合、どのようにして話されるのかという話し方に対して英語以上に注目しなければ、コミュニケーションの目的のある言語行為なのか、非コミュニケーションなセルフトークなのか、見極めがより難しいかもしれない。
- (3) すでに述べたように、私は自己欺瞞を信念の問題としては捉えていないのだが、ファンクハウザーの「一次的信念」は私の言う“believing”であり、「二次的信念」および「より高次の信念」は“thinking”であると理解される。以後、用語上の混乱がないように留意されたい。
- (4) メルロ＝ポンティの引用で言いたいのは、自己欺瞞においては自分の考え(内的な声)であるのか他人の考え(内的な声)であるのか本人が定かではないことや、自分の気持ち(たとえば怒り)は本当にそうであるのか確信が持てないことや、自分が何を感じているのか分からないことがあるということである。

[参考文献]

Audi, R. (1988), Self-Deception, Rationalization, and Reasons for Acting. in McLaughlin, B.P. and Rorty, A.O. (ed.), Perspectives on Self-Deception, Los Angeles: University of California Press, pp.92-120.

Audi, R. (1997), Self-Deception vs. Self-Caused Deception: A Comment on Professor Mele. Behavioral and Brain Sciences, 20, 104.

Back, K. (1981), An Analysis of Self-Deception. Philosophy and Phenomenological Research, 41(3), 351-370.

Bach, K. (1994), Emotional Disorder and Attention. in Graham, G. and Stephens, G. L. (ed.), Philosophical Psychopathology, Cambridge: The MIT Press, pp.51-72.

Bach, K. (1997), Thinking and Believing in Self-Deception. Behavioral and Brain Sciences, 20, 105.

バフチン・M (1995)『ドストエフスキーの詩学』(望月哲男, 鈴木淳一訳)ちくま学芸文庫。M.M. Бахтин(1963)Проблемы поэтики Достоевского, Изд. 2-е. Москва.

Beck, A.T. (1976), Cognitive Therapy and the Emotional Disorder. New York: International Universities Press.

ブランケンブルグ・W (1980)「現象学的エポケーと精神病理学」(若松昇, 木村敏訳)『現代思想』9月号, 青土社, pp.98-117. Blankenburg, W. (1979), Phänomenologische Epoché und Psychopathologie. in Sprondel, W.M. and Grathoff, R. (ed.), Alfred Schütz und die Idee des Alltages in den Sozialwissenschaften, Stuttgart: Enke, pp.125-139.

Davidson, D. H. (2004), Problems of Rationality. Oxford: Oxford University Press.

Diaz, R.M. and Berk, L.E. (1991), Private Speech: From Social Interaction to Self-Regulation. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.

Ellis, A. (1962), Reason and Emotion in Psychotherapy. New York: Lyle Stuart.

Fingarette, H. (1985), Alcoholism and Self-Deception. in Martin, M.W. (ed.), Self-Deception and Self-Understanding: New Essay in Philosophy and Psychology, Lawrence:

University Press of Kansas, pp. 52-67.

Funkhouser, E. (2005), Do the Self-Deceived Get What They Want? *Pacific Philosophical Quarterly*, 86(3), 295-312.

広瀬幸生, 加賀信広(1997)『指示と照応と否定』. 研究社.

Kaiser, H. (1965) *Effective Psychotherapy: The Contribution of Hellmuth Kaiser*. Free Press.

Kihlstrom, J.F. (1987), The Cognitive Unconscious. *Science*, 237(4821), 1445-1452.

Lockie, R. (2003), Depth Psychology and Self-Deception. *Philosophical Psychology*, 16(1), 127-148.

Luria, A.R. (1961), *The Role of Speech in the Regulation of Normal and Abnormal Behavior*. New York: Liveright.

ルリヤ・A・R (1982)『言語と意識』(天野清訳) 金子書房. Luria, A.R. (1979), Язы р к н с о з н а н и е .

Malt, Barbara (2007), Private Speech, Executive Functioning, and the Development of Verbal Self-Regulation. Oxford: Oxford University Press.

Martorano, J.T., and Kildahl, J.P. (1989), *Beyond Negative Thinking: Breaking the Cycle of Depressing and Anxious Thoughts*. New York: Perseus.

Merleau-Ponty, M. (1988), *Merleau-Ponty à la Sorbonne: résumé de cours 1949-1952*. Paris: Cynara.

Morin, A. (2004), Levels of Consciousness. *Science & Consciousness Review*, 2, 1-16.

Morin, A. (2005), Possible Links Between Self-Awareness and Inner Speech: Theoretical Background, Underlying Mechanisms, and Empirical Evidence. *Journal of Consciousness Studies*, 12(4-5), 115-134.

Morin, A. (2009), Inner Speech and Consciousness. in Banks, W. (ed.), *The Encyclopedia of Consciousness*, Amsterdam: Elsevier, in press.

Rhawn, J. (1980), Awareness, the Origin of Thought, and the Role of Conscious Self-Deception in Resistance and Repression. *Psychological Reports*, 46(3), 767-781.

Ryle, G. (1949), *The Concept of Mind*. Lon-

don: Hutchinson.

Sartre, J.P. (1943), *L'être et le néant*. Paris: Editions Gallimard.

Schafer, R. (1992), *Retelling a Life: Narration and Dialogue in Psychoanalysis*. New York: Basic Books.

Scheler, M. (1915), *Vom Umsturz der Werte*. Von Max Scheler, erster und zweiter Band, Leipzig: Neue Verlag.

Shapiro, D. (1965), *Neurotic Styles*. New York: Basic Books.

シャピロ・D (2008)『自己欺瞞の精神療法—ナラティヴの背面へ』(田澤安弘訳) 北大路書房. Shapiro, D. (1989), *Psychotherapy of Neurotic Character*. New York: Basic Books.

シャピロ・D (2008)「自己欺瞞の心理について」(田澤安弘訳) 前掲書『自己欺瞞の精神療法』に付録として所収. Shapiro, D. (1996), On the Psychology of Self-Deception. *Social Research*, 63(3), 785-800.

Shapiro, D. (2000), *Dynamics of Character: Self-Regulation in Psychopathology*. New York: Basic Books.

Shapiro, D. (2006), Self-Reproach and Personal Responsibility. *Psychiatry: Interpersonal and Biological Processes*, 69(1), 21-25.

Smith, D.L. (2004), *Why We Lie: The Evolutionary Roots of Deception and the Unconscious Mind*. New York: St. Martin's Press.

シュテークル・W (1955, 1956)『性の分析: 女性の冷感症 I・II』(松井孝史訳) 三笠書房. Stekel, W. (1920), *Die Geschlechtskälte der Frau*. Berlin: Urban & Schwarzenberg.

Stekel, W. (1953), *Sadism and Masochism Volume 1: The Psychology of Hatred and Cruelty*. New York: Liveright, originally published in 1929.

Stern, D.B. (1997), *Unformulated Experience: From Dissociation to Imagination in Psychoanalysis*. Hillsdale: Analytic Press.

Stiles, W.B., Leiman, M., Shapiro, D.A., Hardy, G.E., Barkham, M., Detert, N, B., and Llewelyn, S.P. (2006) What does the first exchange tell? Dialogical sequence analysis and assimilation in very brief therapy. *Psychotherapy Research*, 16(4), 408-421.

Wallon, H. (1949), *Les origins du caractere chez l'enfant*. Paris : Presses Universitaires de France.

[Abstract]

Analysis of the Functional Role Played by Self-Talk in Self-Deception

Yasuhiro TAZAWA

Self-talk, which includes both inner and private speech, performs a crucial function in self-deception. Although self-talk serves a benign self-regulatory function in ordinary circumstances, it is used in a malignantly-transformed way in the course of self-deception. The self-deceiver desires to believe in something that does not correspond to reality (which we call “not-p”). His activity of talking to himself silently or out loud fills his self-awareness and/or his meta-self-awareness with the thought of “not-p,” regardless of his actually believing in “p”. On the other hand, the associated belief that “p” is a disposition (not an occurrence) remains relatively primitive, vague, and unformulated. In self-deception, it appears from the third-person omniscient point of view that there is a disjunction between meta-consciousness (i. e., re-representing consciousness such as self-awareness and meta-self-awareness), which is actively constructed by distorted self-talk, and non-consciousness (i. e., not really signifying unconsciousness), that is no more than a non-reflectively felt sense and remains diffuse, out of focus, and not noticed. The schism arising out of the self-talk between these two is invisible to the self-deceiver from his first-person perspective because of his syncretization of that which is actually lived with that which is only imagined. This is why the self-deceiver does not know that he is in the state of being self-deceived during the process of deceiving himself.

Key words : Self-Deception, Private Speech, Self-Talk, Inner Speech, Meta-Self-Awareness

